

琉球宮廷舞踊と中国民間歌舞

－徐葆光『中山伝信録』をめぐって－

劉 富 琳

一 はじめに

明洪武五年（1372）、琉球は中国と冊封朝貢の関係を打ち立てた。冊封は1404年の武寧王に始まり、1866年の尚泰王まで、延べ二十二回に及んだ。冊封使一行は季節風を利用して、春から夏の間に琉球に到着し、秋から冬に帰国するので、琉球に滞在するのは半年間ぐらいであった。滞在中、琉球王府は宴を設けて冊封使を歓待した。宴会で披露されていた芸能は、冊封使の使琉球録に記載されている。使琉球録は、冊封使が琉球で見聞したものの記録書であり、冊封の度に記録されていたので、琉球を研究するうえで貴重な資料となっている。残念なことに、現在見ることのできる一番早い時期の使録は1534年来琉した陳侃の『使琉球録』で、これ以前にあったはずの使録は行方不明になっている。使琉球録のうち、冊封儀式における宴会の芸能については、1719年来琉した徐葆光が書いた『中山伝信録』に最も詳しく記載されている。本稿では徐葆光の『中山伝信録』を中心にとりあげ、使琉球録に記された琉球宮廷舞踊と中国民間歌舞の関連を検討してみたい。

二 使琉球録における琉球宮廷舞踊

陳侃の『使琉球録』には、「(七月) 二十二日、復設宴、名曰:拂塵。……。但令四夷童歌夷曲、為夷舞、以侑其觴; 傴僂曲折、亦足以觀。」¹とある。「拂塵」とは歓迎の宴会という意味であり、語義上は冊封使一行が琉球に到着して間もなく催される。ところが、この宴会は冊封儀式が終わった後に開かれたことが、使録中の次の記載から分かる。「越七月二日、封王。……朝罷、別殿設宴、金鼓笙簫之樂、翕然齊鳴」²。つまり、冊封儀式は7月2日に、「拂塵」は7月22日に行われた。

「拂塵」の宴会には「夷舞」という舞踊があった。この「夷舞」は琉球自身

の舞踊だと思われるが、具体的な内容は分からない。その舞踊の様相をまとめると、次のとおりである。

人数	年齢	歌	動作
4人	童子	有	腰を曲げる

なお、陳侃は、「群書質異」の部分で『杜氏通典』³に記載されていた「凡宴会、執酒者必得呼名而後飲；上王酒者亦呼王名、然後銜杯共酌。歌呼踏踢、音頗哀怨；扶子女上膊、揺手而舞」⁴という記事に対して、陳侃自身が琉球で見た際にはこのようではなかったと述べている。陳侃は「楽用弦歌、音頗哀怨；嘗譯其曲有『人老不少年』之句、亦『及時為樂』之意、如唐風之『山有枢』也。更為童子四人手擊柝而足婆娑、以為舞焉。」⁵と記している。この舞踊の様相は次のとおりである。

人数	年齢	動作	小道具
4人	童子	足が軽やか	柝

夏子陽の『使琉球録』には、「土戯」という記述がある。この「土戯」は組踊ではなく、舞踊であろう。なお、夏子陽は『杜氏通典』に書かれていた「踏踢歌呼、扶女子膊上」（夏子陽の引用のまま）ということもないと確認して書いている。

ところで、夏子陽は「亦有土戯、聞皆王宮小従者及貴家子弟習之；登台戴大笠、加以阜帕蒙面、著彩色夷服。群以二十余輩偃僂宛轉同声而謳、皆如出一人。」⁶と書いている。その舞踊の様相は次のとおりである。

人数	年齢	歌	衣装	動作
20余	童子	斉唱	戴大笠、阜帕蒙面、著彩色夷服	腰を曲げる

胡靖の『杜天使冊封琉球真記奇観』には、「時重陽宴天使、觀競渡於斯潭、

(略) 每舟置歌童ト (十) 人、頭戴扇面團製如金笠、垂一金蝶、羽如鶯翅、身被珠瓔珞、飛帶雜垂、如仙童様、各執一描金杖支手立舟中、齊唱夷調。兩傍坐夷人以短楫輪轉拍浪比合相鬪、如鬧然争勝状、薄暮始散。則漚六舟歌童五十余、高歌低舞共演夷戲、不知其歌何調而演何記、第見其群聚、翕如高低不乱、自有一段校習然者。」⁷とある。胡靖が見た舞踊は、二つの場面に分けられる。その様相は次のとおりである。

	人数	年齢	歌	衣装	動作	小道具
場面 1	10 人	童子	斉唱	頭戴扇面團製如金笠、垂一金蝶、羽如鶯翅、身被珠瓔珞、飛帶雜垂。	以短楫輪轉拍浪比合相鬪、如鬧然争勝状。	金杖
場面 2	50 余	童子				

張学礼の『中山紀略』の記載によると、中秋宴と重陽宴で演じられたものは異なる。中秋宴では「鼓楽、走馬、弄刀、刺鎗、舞劍、踢球、走索諸戲」⁸があり、これらは昔、中国の縁日あるいは定期市でよく演じられた「百戲」「雑戲」というものを連想させる。重陽宴で演じられた舞踊は「幼童百余人、皆貴戚子弟——又一少年僧、生成頭長尺五、眉髮雪白、頰綴霜髯、佇立庭中。一童子挽雙髻、杖掛葫蘆、次於寿星之右；一童子、生成背駝、眼細、戴箬笠、穿錦服、手擎蟠桃如東方朔、次於寿星之左。有黒鹿一雙、排於寿星之前。鳴鑼擊鼓、樂童子環繞歌舞；内穿錦衣、外白綾、半臂繡菊花、以応佳節。」⁹とある。その舞踊の様相は次のとおりである。

	人数	年齢	歌	動作	小道具
その 1	100 余	童子	有	回る	
その 2	3	童子	無		杖、葫蘆、蟠桃、鹿

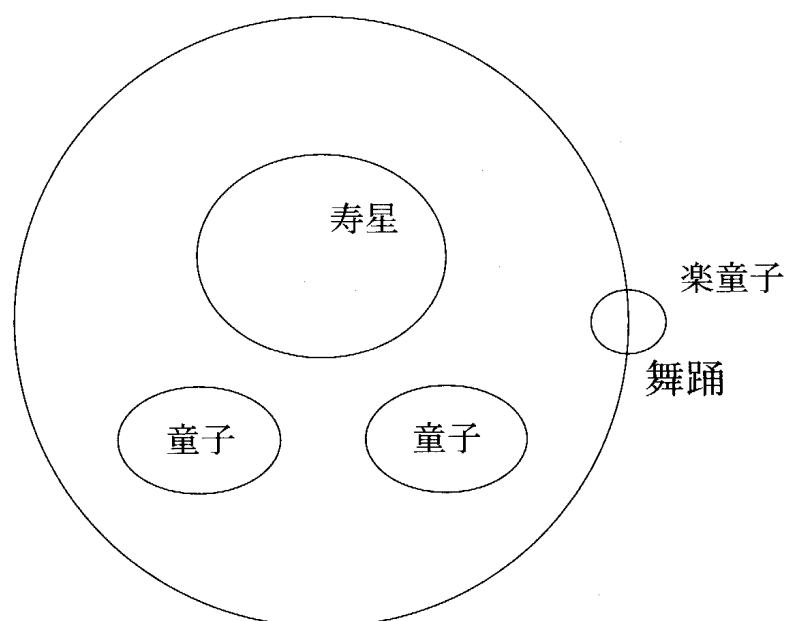
この童子三人の扮装は中国の「寿星」という伝統的な吉祥画を連想させる。「寿星」は髪と眉毛、髭が長くて白い老神である。しばしば蝙蝠、葫蘆、蟠桃、鹿、亀、松、鶴、靈芝という動植物を借りて、人間の長寿や吉祥を象徴

する。現在の中国でも老人の誕生祝いあるいは春節に、「寿星」の吉祥画がよく貼られている。

図 1 : 10



張学礼の記載から考えると、重陽宴での舞踊の様子は次のとおりであると思われる。



汪楫の『使琉球録』には、「国俗九月九日於龍潭競渡、此地重陽節猶中朝端午節也。……。舟列童子二十余人、皆朝臣子弟、披紅簪花、兩人擊鼓、為蕩槳之節、余皆唱歌。」¹¹とある。これは胡靖が龍潭で観た重陽宴の場面一とほぼ同じであろう。また、汪楫が「亭午、請観劇於円覚寺之右殿、演劇用七十余人、年長者十余人、皆戴仮面、吹笛擊鼓鳴鉦為前導、余皆小童年八九歳至十四五、悉朝臣子弟常人不得與、各以金扇面為首飾、周圍挿紙剪菊花、短襖長裙、上以五色蕉布半臂骨之、人手二木管、圍径寸、長不及尺、空其中投以石子、両手交擊作声、歌用按節已。又易小鋏管、細如箸繩、貫数十枚握掌中、為拍板已。又易紙拂子、左右揮之。最後乃各出一扇招搖翻反云、為使臣助順風也。問其曲曰：躍踊歌。強使書之、十不能辨一二、其大指略與龍舟歌同、而詞則加詳耳。晚復於北宮開宴、觀煙火立竿放花置爆竹、草馬中騎而。馳廻環竿下、遇火而震以為笑樂漏再下始罷、宴執炬夾道見自王宮達那霸不啻火城。」¹²と書いている。午後の演目は、手にする小道具によって三つの部分に区分できる。一つは木管であり、二つは小鋏管であり、三つは紙拂子である。また、夜には北宮で花火と騎馬の演目があった。

	踊り手の人数	踊り手の年齢	歌の有無	使われる小道具
午前	20 余	童子	有	
午後	70 余	童子	有	木管、小鋏管、紙拂子

徐葆光の『中山伝信録』は、宴会の芸能について、最も詳しく書いている。

中秋宴：王府庭中、于北宮滴水前造木台、方五、六丈、帷幕四週。王延；「本国混沌之初、首出御世者為天孫氏——如中国羲皇、澹泊為治。嗣後国君登位、神每出示靈佑、乃制『迎神歌』以歡樂之。・後神不屡出、神歌遺曲、至今犹存。每当国王即位及行慶諸事、必皆举行。従前先王受冊封後宴天使、例首宴之。作一老人登場、不作樂、惟唱神歌、拝祝皇上万歳、中外昇平、次頌国王共蒙福祉。当今中秋佳節、天使降臨、真神人共喜之日也。謹尊例、首唱起神歌、黄髮老人百拝稽首、恭頌皇上恩德如天、国王帶砺百世。老人歌罷、拝退；次令戚臣子弟俊秀者数十人衣彩衣、隊隊相続、歌太

平曲、以供宴樂云。

先有樂工六人、引声如梵唄音、無樂。次有戴寿星仮面一人、登場和之。三拝、搓手起舞；舞畢、又三拝、止。次有樂工十四人、着雜色紅緑衣、帽檐六菱、低圧頭頂——或戴燕尾緑頭巾；持樂器三弦二、提琴一（即用三弦、着引弓于上）——三弦槽柄比中国短半尺許、笛一、小鑼一、鼓二登場、前後二行、曲踞上向、引吭曼声歌。寒幔処有小童——可十三、四歳四人、着朱色襪、五色長衣——無帶、開襟搖曳、頭戴黒皮笠、朱纓索曼長垂胸前；回旋而上、時作顧盼、坐起之態。登場、一行面樂工小坐、樂工代為解笠、捲朱纓盤着笠上、仍授之；小童起立、執笠頓足按節而舞、樂工曼声歌與相応：為第一遍笠舞。又有四小童宮妝、剪金扇面作花朵；朱帕紫額、上有金飾；五色衣、項上帶五色花索一團長垂膝下。登場、樂工歌、脱花索、交手頓足按節如前：為第二遍花索舞。次有小童三人——可十余歳、戴珠翠花満頭、着宮裙、五色錦半臂、肩小花藍各一提。登場鼎立、樂工歌頓按如前：為第三編藍舞。次幼童四人、短朱緑五色宮衣、長裙間彩、曳地搖曳。登場、向樂工小坐；樂工各授小竹拍四片、起舞按節、手拍応之：為第四遍拍舞。次有武士六人、着黒白相間綦紋大袖短衣、金箍束額作平頂僧帽式；挺白杖、交撃応節：為第五武舞。又有小童二人、五色衣服、執金球——球上四面着小金鈴、長朱索曼纓、左右舞；引二青獅登場、旋扑：為第六遍球舞。席終換席、又有小童三人宮妝登場、向樂工小坐、工授以小花金桿二枝——長不及尺許、両頭着紅花、交撃応節：為第七遍桿舞。次有小童四人、易宮衣。登場、手執花竿長三尺許——各一枝、舞応節：為第八遍竿舞、時已向昏、撤帷幕、庭中設煙火数十架；又令数人頭戴火笠、騎仮馬、頭尾煙爆齊発、奔走庭中：以為戲樂。宴畢出城、火炬長二丈許者数千、夾道送帰使館——為第三宴。¹³

中秋宴での舞踊は次のとおりである。

暫定の舞踊名称	踊り手の人数	踊り手の年齢	使われる道具	歌の有無
老人舞	1人			有
寿星舞	1人			

笠舞	4人	十三、四歳	笠	有
花索舞	4人	十三、四歳	花索	有
藍舞	3人	十歳余り	藍	有
拍舞	4人	十歳足らず	竹板	
武舞	6人		杖	
球舞	2人	十三、四歳	金球、獅子	
桿舞	3人	十三、四歳	桿	
竿舞	4人	十三、四歳	竿	
仮馬舞	数人		仮馬	

上記のうち、第一遍笠舞、第二遍花索舞、第三編藍舞、第四遍拍舞、第五編武舞、第六遍球舞、第七遍桿舞、第八遍竿舞と記された「舞踊」に特に注目したい。各名称は、舞踊において使われた道具から、また、拍舞と武舞は舞踊における主な動作形態から取られたものである。舞踊に使われる小道具を舞踊の名称として付けるという習慣は、宴会の舞踊を考証する際に、重要な手がかりになると思われる。

次は、重陽宴での芸能である。この宴会で初めて組踊が上演されたほか、舞踊もある。

重陽宴：先設木閣于埠上、結彩数重、氈席四周。王揖客、坐定。龍舟三、式與福州所見略同：梭長三丈余、槳二十八。人皆一色衣、一紅、一白、一黒。每船中央設鼓、彩衣小童擊以為節。前後二彩衣童、執五色長旗。船首一人擊鑼、與鼓相応。齊唱『龍舟太平詞』以歌「聖徳及遠、永享治平；海国蒙恩、竭忠仰報」之意。問其詞、大略與前使所録同。左右旋繞、四岸乃士女匹觀者数百人。龍舟戲畢、国王先辞客、回府第；仍開宴于北宮、演劇六折。略記如後：

第一、為老人祝聖事。老夫婦二人、率子孫五、六人登場跪；国語致詞曰：当今圣天子高堯、舜、道邁湯、文；八埏昭日月之輝、一統着車書之盛。国王夙沐聖恩、新受冊封；天使賁臨、拳国歡忭！小臣老夫婦生長本国、年一

百二十歳、皆康健；子孫三百三十余人、多有登仕籍為官者、挙家蒙福。子孫内有能歌唱、彩舞者、率領献寿、老夫婦再拝先舞；問其歌詞曰：王德如海、民之父母；受封于天、帶砺永固！舞罷、群彩衣童隊隊相続：一、団扇曲（六童舞）；一、掌飾曲（三童舞）；一、笠舞曲（四童舞）；一、藍花曲（三童舞）；以上借名（太平歌）。

第二、為鶴、亀二児復父仇古事。

第三、為鐘魔事。

第四折、為天孫太平歌。共五十余人、先有一披髻頭陀、執白木桿、引五色衣小童——花抹額、各色蕉比甲、腰中各挿菊花一枝、金輪轉竿一枝、共十九人；上場左旋、作一団立：為第一層。次有各色紅緑雜衣郎二十人、上場右旋、作第二層立。次有彩衣小童二、執小点鼓；雜衣郎二人、執銅点；八人、執腰鼓；上場左旋、作第三層立。次有彩衣小童四人、三人執紙帚、一行中立；每唱、此四小童引調唱第一句起、下雜衣郎和之。小童後二層立、樂工二十人居中。外三層左右交轉、外一層小童第一轉、五色扇舞為節；第二轉、金交桿為節；第三轉、舞菊為節；第四轉、舞輪竿為節。畢、轉入第二層、雜衣郎轉出。外一層手舞頓足、回旋為節；四、五番以次旋轉而下。——為第四宴。¹⁴

重陽宴は主に北宮で演じられた。第二、第三折であげられている演目は組踊である。第四折は天孫太平歌という舞踊である。以下は第一、第四折の舞踊をまとめたものである。

暫定の舞踊名称	踊り手の人数	踊り手の年齢	使われる道具	歌の有無
寿星舞	7 / 8 人			有
団扇舞	6 人	童子		
掌飾舞	3 人	童子		有
笠舞（曲）	4 人	童子	笠	有
藍舞	3 人	童子	花藍	有
天孫太平歌	50 余り人	童子	多数	有

李鼎元の『使琉球記』には、「八月初十日（庚申）、晴。……随令舞童舞排列階下、人二十有四；年率十五以上、皆高梳雲髻、戴花滿頭、著彩衣。衣長曳地、袖長等身、両脇不縫、朱襪不履、人物美秀、尽宦家子弟。余與介山賛嘆称謝。……。歸路列炬数里、炬長二丈余；…。蓋国王欲誇耀於客、未免過費；然七宴既捐、所省已不少矣。」¹⁵とある。八月初十日とあるから、この宴は中秋宴であろう。ここに記載された舞踊の様相は下記のとおりである。

「高梳雲髻」の髪型は、女の扮装によく見られる。

人数	年齢	歌	衣装
24	十五		皆高梳雲髻、戴花滿頭、著彩衣。衣長曳地、袖長等身、両脇不縫、朱襪不履

以上から見て、琉球宮廷舞踊の最大の特徴は踊り手が童子であることが分かる。なお、舞台では老人踊りも演じられた。人数の多い集団での踊りは主に雰囲気作りのためであり、小人数の踊りは冊封使に鑑賞させるためであろう。

三 使琉球録における琉球宮廷舞踊の研究

使琉球録における舞踊の研究は矢野輝雄、池宮正治、板谷徹、金城厚などが挙げられる。矢野輝雄は、夏子陽が書いた舞踊の衣裳から、この舞踊は八重山の盆踊りのアンガマである¹⁶と考えている。また、張学礼の書いた重陽宴の舞踊と汪楫が書いた舞踊と徐葆光が書いた舞踊に対して、戊の冠船踊の記録と合わせて考え、これらの舞踊は寿星信仰とつながりがあると指摘した¹⁷。さらに、徐葆光の『中山伝信録』が記した舞踊に対しては、神曲はおもろであり、「笠舞」は「伊野波節」、「花索舞」は「貫花」、「藍舞」は「柳」、「拍舞」は「四つ竹」、「武舞」は「棒術」、「桿舞」は「綾竹」の踊りである¹⁸と論じている。また、池宮正治も同様に、「花索舞」は「貫花」、「藍舞」は「柳」、「拍舞」は「四つ竹」、「武舞」は棒踊り、「桿」「竿」舞も棒踊の系統である¹⁹と論じている。そして、両氏は、汪楫が書いた舞踊の小道具の「紙拂子」が、現在用いられている麿であるとしている。

近年、板谷徹を中心とする研究グループは、尚育王時代の舞踊史料の整理及び村踊の調査を進めている。板谷徹は沖縄本島北部の村踊のフィールド・ワークを通じて、村踊りと冠船舞踊のつながりを指摘した。金城厚は戊の冠船踊りの記録と徐葆光の『中山伝信録』の「天孫太平歌」などを歴史的に考察したうえで、舞踊家の又吉静枝とともに、舞台上で入子踊の復元を試みている。

しかし、以上の研究では、中国舞踊（特に中国民間舞踊）との関連については、まだ触れられていない。史料によれば冊封使の来琉には音楽演奏者も随従して来た。1634年から琉球の江戸上りが行われ、江戸城で中国音楽の御座楽が演奏された。『琉球人座楽并躍之図』²⁰に描かれた「打花鼓」²¹「和番」の状況から見て、中国の舞踊が琉球に伝わってきたことが分かる。

四 琉球宮廷舞踊と中国民間歌舞

以下は、徐葆光の『中山伝信録』に記載されているいくつかの「舞」について、中国民間舞踊と関連があると思われるものについてとりあげてみたい。

1. 「藍舞」と中国の「采茶舞」

藍舞については、「小童三人——可十余歳、戴珠翠花満頭、着宮裙、五色錦半臂、肩小花藍各一提。登場鼎立、楽工歌頓按如前」という記述があるので、踊り手は三人で十歳余り、頭に若葉と花の輪をかぶり、宮廷衣裳を着し、彩り豊かな袖を身に着け、小道具の小花藍は一人に一つずつ肩に載せること、歌は伴奏者が歌うことなどが分かる。春の雰囲気に溢れた舞踊のように感じられる。

藍舞という舞踊の名称は、小道具として用いられる小さな花藍に由来している。この表記からは中国の舞踊の「采茶舞」が連想される。「采茶舞」は中国民間舞踊の一つとして、広く中国の雲南、貴州、広西、広東、江西、福建、浙江、江蘇、安徽、湖南、湖北など南方の茶の産地に伝わっている。「采茶舞」は地域によって、茶歌、采茶歌、唱采茶、采茶灯、茶藍灯などとも呼ばれる。

「采茶戯」という地方戯曲もある。「采茶舞」についての最も早い記録は明・王驥徳の『曲律』（1624年）で、「至北之濫、流而為『粉紅蓮』『銀紐糸』『打

棗桿』、南之濫、流而為吳之『山歌』、越之『采茶』諸小曲、不啻鄭聲、然各有其致」²²と記載されている。また、清・李調元の『粵東筆記』には、「粵俗、歳之正月、飾兒童為彩女、每隊十二人、人持花藍、藍中燃一宝灯、罩以絳紗、明絙為大圈、縁之踏歌、歌十二月采茶」²³とも記載されている。このように、「采茶舞」の歴史は明時代にまで溯ることができる。

「采茶舞」の踊り手は普通、男一人女一人、男一人女二人あるいは三人以上で、一人が一つずつ花藍を持ち、色鮮やかな衣装を着て、歌いながら踊る。踊りは茶摘み作業の過程を模倣したり、あるいは若い男女の愛情を表わす。采茶舞に使われる花藍は竹で作り、花で飾っていたが、その後、花藍が灯藍に変わった。灯は丁の発音に似ており、丁の字には吉祥の象徴的な意味があるからである。そのため、采茶舞は旧正月、正月十五日の元宵などの祭りのときによく踊られる。

図2：采茶舞²⁴



采茶舞の音楽は歌と器楽からなる。音楽はいずれも軽やかで、快活である。伴奏の器楽は、打楽器で演奏する采茶鑼鼓と民間小曲である。旋律はいずれも茶摘みにちなんだ茶歌という曲種に由来している。

『中山伝信録』には、中秋宴で踊られた藍舞は樂工が歌を歌うと記されているものの、その歌がどのような曲かは分らない。王耀華の研究によれば、中

城伊集の打花鼓に残っている音楽は中国の『茉莉花』から変化したものである。この『茉莉花』は中国でもよく「采茶舞」に使われていることから、中秋宴における「藍舞」に『茉莉花』が歌われたのではないかと推測される。さらに、「藍舞」の舞踊は、中国の「采茶舞」が伝わってできた一つの変体だろうと考えられる。なぜならば、琉球に関する事務を主管していた市舶司は、それぞれ福建省の泉州と福州にあり、両地域とも主に茶の産地であったからである。現在泉州は鉄観音の烏龍茶の生産が盛んで、福州は茉莉花茶の生産が盛んである。

2. 「球舞」と中国の「文獅舞」

『中山伝信録』の記述「小童二人、五色衣服、執金球——球上四面着小金鈴、長朱索曼纓、左右舞；引二青獅登場、旋扑」によれば、球舞つまり獅子舞が行なわれていたことがわかる。獅子舞の起源は大変古い。『漢書・礼楽志』に「象人」という語が記載されているが、三国時代の孟康はこれが「若今戲魚蝦獅子者」²⁵（今日の祭りに登場する魚や蝦や獅子の扮装である）と指摘している。唐代以後、獅子舞が宮廷で演じられるようになった。これは燕楽の太平楽として演じられた五方獅子舞である。また『続文献通考』に「明孝宗弘治三年秋、召各番使入内看戲獅子」²⁶と記載されている。百獣の王である獅子は吉祥の化身であり、邪気を追い払うと信じられているので、祝日には獅子舞を踊る風習が生まれた。さらに、屋根、正門などに石獅子を置いたり、切り紙の獅子を飾ったりもする。

獅子舞の獅子は二人で演じ、一人が獅子頭と前足を、一人が後足を操る。別の一人が球を持ち、武士あるいは獅子郎などの扮装で獅子を遊ばせる。獅子は二匹いることが多く、互いに遊び戯れる。中国では獅子舞の類型に文獅舞と武獅舞の二つの種類がある。文獅舞は球をもて遊び、転げ回り、毛を舐めたり、耳をかくななどのおもしろい演技を主とする（図3）。これに対し、武獅舞は武術と曲芸が主で、獅子の動物らしい跳躍、とんぼ返りなどの動作をする（図4）。獅子舞には文獅舞、武獅舞のほかに、手で持つ獅子舞（手獅舞）もある（図5）。

図3：文獅舞²⁷



図4：武獅舞²⁸

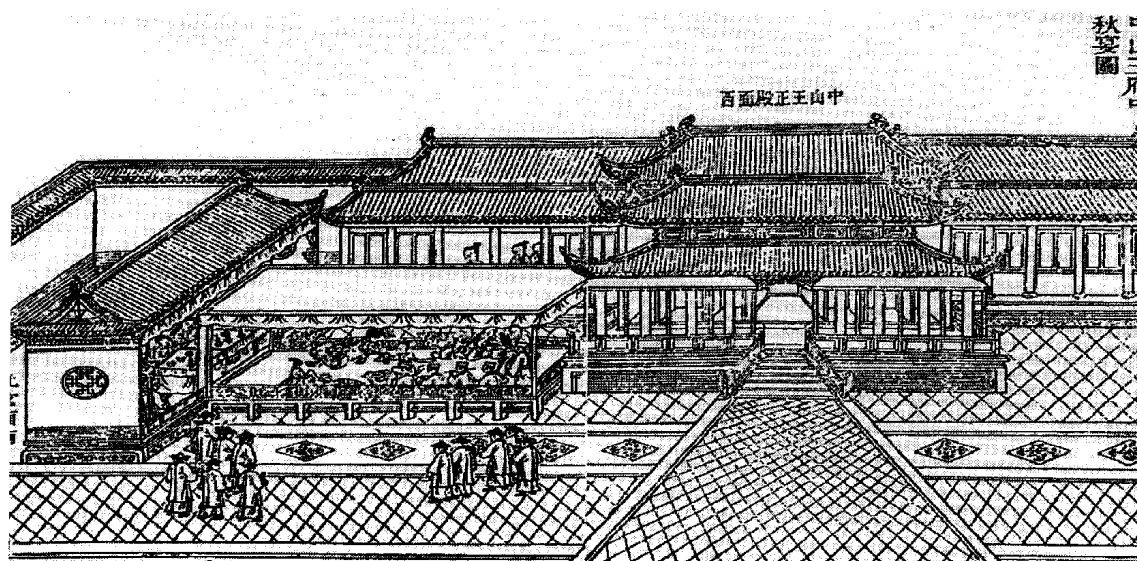


図5：手獅舞²⁹



なお、徐葆光の『中山伝信録』の中秋宴の挿し絵によれば、当時上演された獅子舞は文獅舞であろう。

図6：³⁰



3. 「桿舞」「竿舞」と中国の「霸王鞭」

桿舞と竿舞の「桿」と「竿」の漢字は、細長い棒をという意味である。両者の区別は、桿が木類で作られたもので、竿が竹類で作られたものである。したがって、桿舞と竿舞は異なる踊りであろうということが小道具から推測できる。徐葆光は桿舞の棒の長さが「長不及尺許」、竿舞の棒の長さが「長三尺許」と記しているので、竿舞は中国の霸王鞭という舞踊に似ている。桿舞は竿舞の変体ではないかと思われる。

霸王鞭は地域によって打蓮廂、花棍舞、金錢棒、金錢棍、打錢套とも呼ばれる。一般的には竹で作られた棒で、長さは一メートル余り、両端に穴をあけて、銅銭を取り付けてある。演技は、霸王鞭で体をたたきながら、銅銭を鳴らして踊る。この踊りは中国各地に広まっている。清・毛奇齡の『西河詞話』には「金作清樂、仿遼時大樂之制、有名蓮廂詞者、帶唱帶演、以司唱一人、琵琶、笙、笛各一人、列坐唱詞、……此人至今謂之蓮廂、亦曰打蓮廂」³¹と記載されている。清・李振声『百戲竹枝詞』にも「徐沛伎婦、以竹鞭綴金錢、擊之節歌」³²と記載されている。

図7：霸王鞭の楽器³³

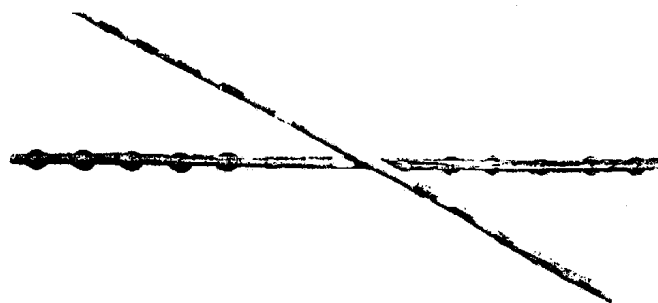
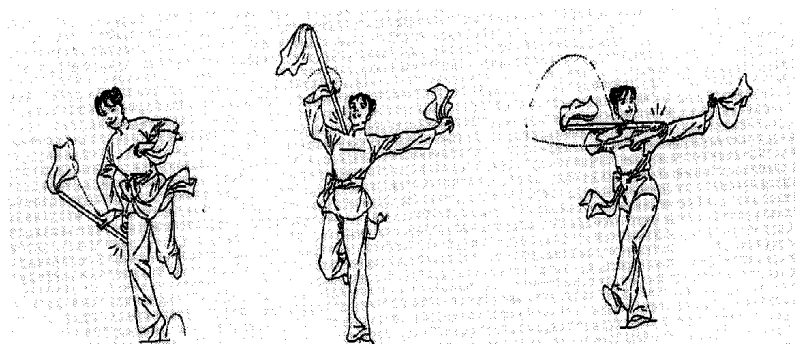


図8：福州地方の打錢套³⁴

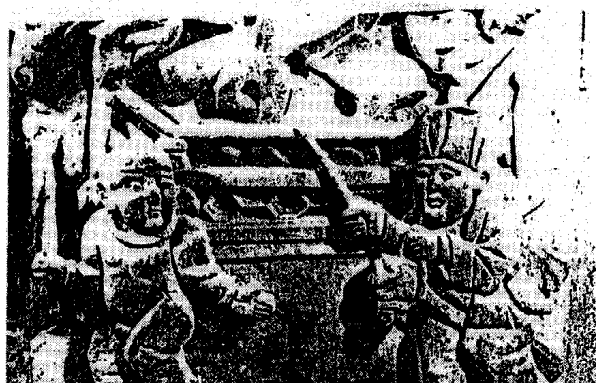


4. 「騎仮馬」と中国の「跑馬灯」

徐葆光は以上の舞踊のほかに、「時已向昏、撤惟幕、庭中設煙火数十架、又令数人頭戴火笠、騎仮馬、頭尻煙爆発、奔走庭中、以為戯楽」と記載している。この「騎仮馬」「奔走庭中、以為戯楽」という光景は中国の「騎仮馬」という芸能に似ている。

「騎竹馬」は地域によって、耍馬燈、踩馬燈、跑馬燈、唱馬燈などと呼ばれ、中国の民間に広まっている。張子の馬を使うが、竹で骨組を作り、紙あるいは布をそのうえに張っている。縄で張子の馬を肩に掛け、馬の動作を真似て踊る。騎竹馬の歴史は唐時代に溯る。宋代『東京夢華録』の「社火」には「小兒竹馬、踏蹺竹馬、男女竹馬」などの型が記載されている。福建の泉州地方には竹馬戲があり、普通は舞踊として踊られている。

図9：竹馬³⁵



山西省稷県で発掘された児童竹馬石彫刻

図10：竹馬灯³⁶



図11：泉州の馬灯戲³⁷



以上の采茶舞、獅子舞、霸王鞭、跑馬灯は、中国ではいずれもおめでたい時に、例えば、旧正月にあたる春節、元宵節のほか、さまざまな祭り、縁日あるいは祝儀の場で踊られ、吉祥とめでたい雰囲気醸成する。

五 まとめ

冊封は琉球国の最も重要な儀礼で、国家最大の慶事であるから、首里城全体が喜びに満ち溢れていたであろう。宴会儀式で琉球芸能を上演するのは、この喜びの雰囲気を醸成するのに大きく寄与している。また、さらに中国民間舞踊の「采茶舞」「獅子舞」「霸王鞭」「騎仮馬」はいずれも喜びの雰囲気に溢れて、冊封儀式を盛り上げるのにふさわしかったのではないか。

陳侃の『使琉球録』の「夷舞」から、徐葆光の『中山伝信録』に記録された「笠舞」「竿舞」などに至るまでの間には、琉球宮廷で踊られる舞踊の種類が大幅に増えている。しかし、歴史上の宮廷舞踊と現在上演されている舞踊を比較すると、一部の宮廷舞踊は後世に伝わらなかったと考えられる。例えば、「藍舞」「桿舞」「竿舞」「騎仮馬」などである。また、一部は民間へ伝わり、例えば、「獅子舞」「打花鼓」のように民俗芸能になった。そこで、使琉球録に記された宮廷舞踊の研究から、現在上演されていない伝承の途絶えた舞踊の復元が可能になるだろう。その参考として、琉球宮廷舞踊と中国舞踊との関連の研究も今後の新たな課題となるだろう。

謝辞：本研究は平成十六年度日本学術振興会事業より、科学研究費補助金（特別研究員奨励費）を受けて行われた。本稿を執筆するにあたり、沖縄県立芸術大学の金城厚教授から本論文全体にわたるご指導・ご助言をいただきました。日本語に翻訳するにあたり、同大博士課程の長嶺亮子さんからご教示を賜りました。ここに、深く御礼申し上げます。

注

- 1 那覇市企画部市史編集室『那覇市史・資料編・第一巻3』那覇市史編集室、1977年、6頁。
- 2 前掲1。
- 3 『杜氏通典』は、唐801年に、杜佑の撰したものであり、唐の天宝年間ま

での諸制度を通観したものである。

- 4 前掲1、11頁。
- 5 前掲1、11頁。
- 6 前掲1、39頁。
- 7 前掲1、43頁。
- 8 前掲1、46頁。
- 9 前掲1、46－47頁。
- 10 王朝聞監修『中国民間美術全集』9巻、華一書局、1994年、53頁。
- 11 前掲1、53頁。
- 12 前掲1、54頁。
- 13 前掲1、99、102頁。
- 14 前掲1、102、104頁。
- 15 前掲1、254頁。
- 16 矢野輝雄『沖縄舞踊の歴史』築地書館、1988年、72頁。
- 17 矢野輝雄「冠船の寿星」『組踊を聴く』（瑞木書房、2003年）を参照。
- 18 前掲16、76～82頁を参照。
- 19 池宮正治『沖縄芸能文学論』（光文堂、1982年）を参照。
- 20 沖縄県立博物館蔵。
- 21 沖縄「打花鼓」と中国「打花鼓」の比較研究は王耀華著『琉球・中国音楽比較論』（那覇出版社、1987年）を参照。
- 22 『中国大百科全書・音楽舞踊』中国大百科全書出版社、1988年、78頁。
- 23 前掲22、78頁。
- 24 王朝聞監修『中国民間美術全集』14巻、華一書局、1994年、291頁。
- 25 前掲22、585頁。
- 26 前掲22、585頁。
- 27 前掲24、286頁。
- 28 前掲24、183頁。
- 29 王朝聞監修『中国民間美術全集』13巻、華一書局、1994年、298頁。
- 30 前掲1、101頁。
- 31 前掲22、40頁。

- 32 前掲22、40頁。
- 33 薛芸兵『中国楽器志・体鳴巻』人民音楽出版社、2003年5月、183頁。
- 34 『中国民族民間舞蹈集成・福建巻』中国 ISBN 中心出版、1996年、797頁。
- 35 王克芬『中国舞蹈発展史』上海人民出版社、2003年、11頁。
- 36 前掲24、3頁。
- 37 前掲34、492頁。

参考・引用文献

- 1、王克芬『中国舞蹈発展史』上海人民出版社、2003年。
- 2、王朝聞監修『中国民間美術全集』華一出版、1994年。
- 3、研究代表者：板谷徹『尚育王代における琉球芸能の環境と芸能復元の研究』2003年3月。
- 4、宜保栄治郎『琉球舞踊入門』那覇出版社、1979年。
- 5、薛芸兵『中国楽器誌』体鳴巻、人民音楽出版社、2003年。
- 6、中国音楽辞典編集部『中国音楽辞典』人民音楽出版社、1985年。
- 7、中国大百科全書編集部『中国大百科全書・音楽舞踊巻』中国大百科全書出版社、1989年。
- 8、中国民間舞踊集成編集部『中国民族民間舞踊集成・福建巻』中国 ISBN 中心出版、1996年。
- 9、中国民族民間音楽集成編集部『中国民間歌曲集成・浙江巻』人民音楽出版社、1993年。
- 10、中国民族民間音楽集成編集部『中国民間歌曲集成・福建巻』中国 ISBN 中心出版、1996年。
- 11、那覇市企画部市史編集室『那覇市史・資料編』第1巻第3冊、市史編集室、1977年。
- 12、矢野輝雄『沖縄舞踊の歴史』築地書館、1998年。
- 13、矢野輝雄『組踊を聴く』瑞木書房、2003年。